

今日ヨハネ黙示録を読むために

今日ヨハネ黙示録を読むために⁽¹⁾

中 野 実

ヨハネ黙示録の魅力？

ヨハネ黙示録は、聖書正典内における配列という視点から見ると、非常に重要な位置を占めている。すなわち、キリスト教の正典を締めくくる役割を与えられた文書である。(旧約、新約という二つの部分を含む)キリスト教の正典の物語は、天地創造について語る創世記で始まり、新しい創造について語るヨハネ黙示録で締めくくられる。換言すれば、天地創造のはじめから計画され、また成就されつつある神の目的が、ヨハネ黙示録において完成する。

そのように重要な正典的な位置を占めているにもかかわらず、同時にキリスト教史の中で常に疑問視されてきた書物がヨハネ黙示録である。ヨハネ黙示録は、驚異的なほどにイメージ豊かな文学作品である。視覚的想像力を刺激する数多くのイメージや謎めいた象徴で満ちている。もちろん、それらは混沌とした状態でそこにあるのではなく、一つの象徴世界を作り出すために、また明確な神学的主張をするために、それらは入念な仕方で用いられている。しかし、そのようなヨハネ黙示録の難解さ、ユニークさのゆえに、誰にもすんなりと受け入れられてきたわけではなかった。それ故、古代教会以来多くの神学者がヨハネ黙示録に対して懸念を持ってきたことは事実である。

しかし同時に、なお多くの人々を魅了し続けてきたことも忘れてはならない。例えば、ある人たちは、ヨハネ黙示録を通して世界(歴史)の終わりのタイム・テーブルを読み取ろうと試みてきた。彼らの多くは、無批判的に聖書を解

釈する人たち（批判的聖書学を受け入れず、テキストの本来の意味を無視する読み方をする人たち）であるが、ヨハネ黙示録から自分たちの時代に対する神の託宣を直接引き出そうとする。例えば、彼らは「ヨハネ黙示録に登場するこのしるしは、私たちの時代に起きているこの出来事を指し示しているのだ」と考える事によって、一対一対応の仕方で自分の時代（世界、社会）と黙示録の文学的象徴世界を結びつけ、それによって自分の時代に対する神の奥義を解説しようとする。

しかしヨハネ黙示録が魅了しているのは、これらの人々だけではない。最近のヨハネ黙示録研究の成果に目を通すと気づくことだが、優れた最近のヨハネ黙示録研究者の幾人かは、はっきりと解放の神学やフェミニスト神学的な問題意識を持っている。そして、自分の研究成果をそのような問題意識と結び付け、発展させようと試みている（例えば、R. Bauckham, B. Blount, Ch. Rowland, E. Schüssler Fiorenza)⁽²⁾。すなわち、彼らにとって、ヨハネ黙示録は現代世界、現代社会における政治的、社会的な解放を生み出すための大切なヴィジョンを与えてくれる書物なのである。確かにヨハネ黙示録は、ローマ帝国への批判的メッセージを含んでいるがゆえに、そこから現代社会（文化）への批判を読み取っていこうとする神学的解釈は、自然な成り行きなのかもしれない。

黙示（録）であり、預言であり、書簡であるヨハネ黙示録⁽³⁾

今日ヨハネ黙示録を読むために学ばなければならないことは多くある。ここでは時間の関係上、大切と思われることの一つだけを取り上げる。それはヨハネ黙示録のもっている文学類型上の特徴である。その文学類型を分析すると、ヨハネ黙示録は黙示（録）とも、預言（書）とも、また書簡とも考えられる。この複雑な文学的特徴は、実は私たちがヨハネ黙示録を正しく理解するための大切な鍵なのである。

黙示（録）としてのヨハネ黙示録：ヨハネ黙示録は、新約聖書において唯一の黙示録である。この書物は、「イエス・キリストの黙示（アポカリュプシス）」という言葉で始まる（黙 1：1）。それゆえ、この書物自体が自らを黙示、あ

今日ヨハネ黙示録を読むために

るいは黙示録と見なしていると考えてよいであろう。黙示（あるいは黙示録）とは何かについて、すでに多くの学者が議論してきた。その長年の成果として広く受け入れられている黙示（録）の定義の一つは次のようなものである。

黙示（録）とは「物語の枠組みを持った、啓示文学の文学類型の一つである。そこにおいて啓示は別世界の存在者によって仲介されて人間である受け手に伝えられる。それによって超越的な現実が開示されるのであるが、その現実は終末における救いを描写する限りにおいて時間的なものであり、もうひとつの超自然的な世界にかかわるという限りにおいて空間的なものでもある」（John J. Collins）⁽⁴⁾。

この定義に照らしてヨハネ黙示録を見た場合、ヨハネ黙示録はほとんど問題なく「黙示録」としての文学類型をもっていると結論付けられるであろう。ヨハネ黙示録は、その異常なほどに豊かなイメージ、多くの謎めいた象徴をもって、読み手をその物語世界へと巻き込み、別の超越的な現実を開示する。読者を現実世界からもうひとつの別世界へと連れて行ってしまう、このような文学的効果について、多くの人が懸念を持つことは当然かもしれない。例えば、私たちは想像力をもってヨハネ黙示録を読むことにより、現実世界を離れて、別世界へと逃避していることにならないか？ そのとき私たちは現実世界に思いを向けたとしても、どこか遠いところから眺めているようなことにならないだろうか？ このような懸念は正当である⁽⁵⁾。さらに、ヨハネ黙示録をはじめ、多くの黙示文学は決定論的な歴史観、二元論的な世界観を含んでいる。決定づけられた歴史のタイム・テーブルを読み取ろうとする試みは、黙示録自体が潜在的にもっている解釈の可能性だと言えなくもない。また悲観的な世界観をルーツにもつ二元論は、「内の者と外の者」、あるいは「味方と敵」というような紋切り型の世界観を生み出す危険を秘めている。

しかし、黙示録の中心的な（あるいは本来的な）関心事は、必ずしも別世界への逃避を正当化するものではない。むしろ、A・ヤーブロ・コリンズが正しく指摘するように、黙示録は「現在の地上の状況を超自然的な世界と将来の光のもとで解釈し、神の権威によって聴く者たちの理解と振舞いの両方に影響を

及ぼすことを意図している」ものなのである⁽⁶⁾。ヨハネ黙示録の場合は特にそうである。ヨハネ黙示録が現在の地上の状況に中心的関心を持っている事は、ヨハネ黙示録が旧約聖書に遡る預言的な伝統に自覚的に立っているという事実からも裏付けることができるであろう。

預言としてのヨハネ黙示録：黙 1：3 から分かるように、ヨハネは自らの書物を礼拝の中で朗読されるべき預言の言葉として理解している（22：10-20も参照）。ヨハネはユダヤ人キリスト教の預言者の一人であったと思われる。しかしここで注目したいのは、自分の任務が旧約の預言者の伝統の延長線にあるというヨハネの自覚である⁽⁷⁾。ヨハネ黙示録には旧約預言書のはっきりとした引用はないけれども、おびただしい数の暗示で満ちている。興味深いことに、ヨハネはτάδε λέγειという70人訳に多く見られる預言の導入句を好んで用いている（黙 2：1，8，12，18；3：1，7，14）。また黙10：7 は旧約の預言者たちとヨハネの任務との結びつきを示しているし、続く黙10：8 -11では預言者エゼキエルがヨハネのモデルとなっている。さらにヨハネのバビロン（＝ローマ）に対する託宣は（黙18：1 -19：10）、旧約預言者たちのバビロンおよびティロスへの託宣を思い起こさせる⁽⁸⁾。このようなヨハネの自覚は何を意味するのであるか？ 広く認められているように、旧約の預言者たちの活動の場は、イスラエルという民族的世界であった。それと比較すると、確かにヨハネ黙示録の世界は、空間的には宇宙大に拡大し、時間的には創造のはじめから終末の終わりまでを見渡せる、超越的な世界である。そういう意味では預言的というより、黙示的である。しかし、ヨハネが明らかにしたいことは、世界、歴史に対する神の終末的な目的である。それ故、神も小羊であるキリストも「アルファであり、オメガである方」、すなわち全世界、全歴史の主として描かれる。ヨハネ黙示録が読者に求めることは、超越的な象徴世界の開示によってこの世界、歴史に対する神の目的を知り、それによって新しい視点をもって世界と歴史を見直し、新しい仕方で生きはじめる事である。これは、預言の伝統とも結びつく特徴だと言いうるのではないか。

書簡としてのヨハネ黙示録：ここでさらにもう一つの文学類型の特徴に目を

今日ヨハネ黙示録を読むために

向きたい（1：4-6；2-3章；22：21）。それは書簡（手紙）としての特徴である。言い換えると、黙示録の内容は具体的な宛先に向けて語られているということである。確かに黙示録の中心は、何よりも4：1-22：9の幻の部分である。しかし2-3章に見られる七つの教会に宛てられた回覧書簡としての性格を過小評価してはならない。ヨハネ黙示録は全体として、エフェソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルデイス、フィラデルフィア、ラオディキアという特定の状況に向けられた手紙である。もちろん、七という数字を完全数として理解し、そこから普遍的な意味合いを読み取ることも可能であるが、特定の状況の中を生きる教会に具体的に向けられているという点を見落としてはならないと思う。ヨハネ黙示録の書かれた目的は、苦しみの中を生きる教会、キリスト者を慰め、力づけるためである、としばしば言われる。それ自体は正しい。しかし、七つの回覧書簡の中に見られるような、教会の姿勢を批判し、悔い改めを迫る発言もまた非常に重要である。黙示録が語っているのは、一般的な世界論、歴史論ではなく、キリスト者が生きる特定の状況、そしてその中で信仰共同体がどのように生きていくかである。そこで教会に勧告される最も大切なメッセージは、「苦しみの中を歩む教会が十字架によって死なれたイエスの証しに忠実であり続けることにより、勝利者となれ」ということである。

黙示録の中心的メッセージ

すでに確認してきたように、黙示録は、超越的世界を開示してくれる黙示的書物である。ヨハネは4章において天が開け、玉座に座っている神を見る。さらに5章では屠られたような小羊が世界の支配者として即位されるのを見る。このような超越的な側面が強調されることによって、当然のことながらイエスの神性も際立った仕方で強調される。世界の創造主であり、支配者である唯一の神と小羊イエスとがはっきりと同一視される。神と小羊の密接なむすびつきについて、黙5：13；7：9-10；14：4；21：22；22：1-5を参照せよ。また興味深い事に、黙示録においてイエスは神のように明確に礼拝の対象となる⁽⁸⁾。しかし、このようなキリスト論の超越的な側面の強調は、イエスの歴史性と分

離できない仕方で結びついている。例えば、天における小羊の（歴史の主としての）即位がイエスの死を通して実現された現実である事を見落としてはならない。イエスの死は、サタンの力に対する敗北ではなく、むしろ勝利である。十字架の死という歴史的出来事において小羊イエスは勝利をおさめ、天において歴史の主として即位される。これによって世界の歴史は新しい局面をむかえた⁽¹⁰⁾。このような驚くべき事実を啓示された教会は、その黙示に基づく豊かな信仰の想像力をもって、世界、歴史を見直し（例えば、ローマ権力の欺瞞を暴露する）、そこにおける戦いに参加していくことが求められている。その戦いは武力によるものではなく、小羊の血による戦い、すなわちイエスの証しに忠実であり続ける戦いである。

（なかの　みのる）

〔注〕

- （１） 本稿は2003年 1 月 7 ～ 9 日に行われた第34回教職セミナー（主題：教会と現代社会）において口頭で発表したものに基づいている。
- （２） 例えば、R・ボウカム『ヨハネ黙示録の神学』飯郷，小河訳（新教出版社，2001年）（以下『神学』と略す）；Richard Bauckham, *The Climax of Prophecy: Studies on the Book of Revelation* (Edinburgh: T&T Clark, 1993)；ブライアン・K・ブランド「今日黙示録を読む：積極的抵抗としての証」伊東訳『日本版インタープリテーション』60号（2001年 5 月）100-126頁；Christopher C. Rowland, "The Book of Revelation," in ed. Leander E. Keck, *The New Interpreter's Bible* (Vol. XII; Nashville: Abingdon Press, 1998)；pp. 501-743；Elizabeth Schüssler Fiorenza, *Revelation: Vision of a Just World* (Edinburgh: T&T Clark, 1991) を参照。
- （３） 黙示であり、預言であり、書簡であるというヨハネ黙示録の文学類型の特徴について、David E. Aune, *Revelation 1-5* (WBC52A; Dallas: Word Books, 1997), pp. lxx-xc, およびボウカム『神学』3-23頁を参照。
- （４） John J. Collins, *The Apocalyptic Imagination: An Introduction to Jewish Apocalyptic Literature* (Second Edition; Grand Rapids: Eerdmans, 1998), pp. 4-5。
- （５） この関連で、大貫隆『終わりから今を生きる：姿勢としての終末論』（教文館，1999年）が興味深い。

今日ヨハネ黙示録を読むために

- (6) Adela Yarbro Collins, *Cosmology and Eschatology in Jewish and Christian Apocalypticism* (Leiden: Brill, 1996), p.7.
- (7) この点を高く評価するのがボウカムである。ボウカム『神学』5-8頁参照。
- (8) 前項書, 7-8頁。
- (9) 唯一神信仰とキリスト信仰との関係について, Richard Bauckham, *God Crucified: Monotheism and Christology in the New Testament* (Grand Rapids: Eerdmans, 1998), および Larry W. Hurtado, *One God, One Lord: Early Christian Devotion and Ancient Jewish Monotheism* (Second Edition; Edinburgh: T&T Clark, 1998) を参照。
- (10) 佐竹明『ヨハネ黙示録』下(新教出版社, 1989年) 752頁。